李寄
註解 改正月令傳物筌 三冬部 四

三冬之部目録

△印ある八前より季ふ用ひきたる分なり

時令之部

△冬風　冬一丁
△冬日　冬一丁
△冬雨　冬三丁
△寒夜　冬三丁
△さむ空　冬四丁
△凍　冬四丁
△雪　六花　六出　冬五丁
△雪粥　冬八丁
△雪花　六花　冬八丁
△雪肌　冬九丁
△雪聲　冬九丁
△富士雪　冬十丁
△霜　冬十丁
△冬霧　冬一丁
△冬七月　月さゆる　月凄し　冬二丁
△山眠る　冬三丁
△冬暁　寒き朝　冬四丁
△さむし　冬四丁
△清められ　冬五丁
△雪山　冬八丁
○粉雪　冬八丁
△ちづる雪　冬九丁
△雪空　冬九丁
△雪消　冬十丁
○酒中之文　冬十丁

△霜柱 冬一三
△霜氷 冬一四
△霜夜 冬一五
△霜花 三ツ比花 冬一三
△はだれ霜 冬一三
△氷聲 冬一四
△鐘氷 冬一四
△露氷 冬一四
△氷の轄 冬一四
△氷 厚氷 氷花 氷衣 凍氷 冬一三

冬混雑之部

此部ハ日令時令草木ニ
ハかゝらぬる品をいゝ

△炭 切炭 池田炭 輪炭 炭團 冬一五
△炭竈 炭焼 小野炭 冬一五
△獣炭 冬一五
△榾 骨熏炭 冬一六
△廻炭 冬一六
△白炭 枝炭 冬一六
△賣炭翁 冬一六
△炭斗 冬一七
△助炭 冬一七
△炉 地炉 冬一七
△埋火 炉火 冬一七
△炉裏 冬一七
△火燵 置こたつ 冬一七
△塗炉縁 冬一七
△手炉 懐炉 手焙 冬一七
△火桶 火鉢 冬一七

△湯婆 冬一七
△蒲團 冬一七
△衾 敷衾 小衾 冬一七
△寝衾 ふすま衾 ふすまの小衾 冬一七
△麻衾 ぬき小衾 冬一七
△紙衣 紙子 羽織 冬一七
△頭巾 兄頭巾 角巾 冬一七
△綿 綿打 綿摘 綿操 綿 唐綿 冬一七
△足袋 冬一七
△束綿 綿摘 冬一七
△綿帽子 冬一七
△綿衣 冬一七
△水洟 冬一七
△胼 冬一七
△皸 冬一七
△寒瘡 妙薬 冬一七

冬草木之部

△新 冬一七
△葱 冬葱 冬一七
△胡蘿蔔 冬一七
△枯野 冬一七
△朽野 冬一七
△冬木立 冬一七
△寒草 冬の草 冬一七

冬生類之部

△鷹 兄鷹 承鷹 冬一七
△鶺鴒 鴨鷹 冬一七
△雉 冬一七
△角鷹 鷂 鵰 冬一七

△大鷺狩（鷺狩 鷺野）冬 廿三
△狩場雉 冬 廿三
△追鳥狩 冬 廿三
△鳥の落草 冬 廿三
△力草 冬 廿三
△教草 冬 廿三
△ぬす立鳥 冬 廿四
△鳥立慕 冬 廿四
△鷹匠 冬 廿四
△列平縄 冬 廿四
△鳥叫 冬 廿四
△鷹犬（狩杖）冬 廿四
△千鳥（川千鳥 村千鳥 小夜千鳥 えハ千鳥 浦千鳥 濱千鳥 島千鳥 友千鳥）冬 廿五
△友千鳥（西ノ千鳥 名ハ千鳥）冬 廿五
△鷺の衾 冬 廿五
△鷺の沓 冬 廿五
△鷺鳶 冬 廿五
△鴨（真鴨 小鴨 黒鴨 鴨 羽白）冬 廿六
△水鳥 冬 廿六
△浮寐鳥（ゆちむら ゆちの村鳥）冬 廿六
△鷸 冬 廿六
△木兎 冬 廿六
△鱈（塩鱈）冬 廿六
△雲膓 冬 廿六
△蛎 冬 廿六
△蛎舟 冬 廿六
△鯨（鯨突 鯨突 鯨舟）冬 廿六
△氷魚（氷魚使）冬 廿七
△鮒 冬 廿七
△網代（網代木 網代人）冬 廿七
△夜與引 冬 廿七
△柴漬 冬 廿七
△竹筍 冬 廿七
△潤眼 冬 廿七
△河豚汁 冬 廿七
△生海鼠（海鼠 金海鼠）冬 廿七
△海鼠腸 冬 廿七
○鮪（初の鮪）冬 廿七

必用之部

此部ハ冬の天氣うらゝかにして其外養生等まのこと

飲食之部

△切干 冬 廿七
△生薑酒 冬 廿七
△鍋焼 冬 廿七
△風呂吹（大根蒸 ふろふき）冬 廿七
△由味噌 冬 廿七
○料理献立 終
△蕎麦湯（そば湯）冬 廿七
△杉焼 冬 廿七
△納豆汁 冬 廿七
△雑卵酒 冬 廿七
△蕪漬（蕪菜）冬 廿七

○此書の本文をいろは分みゝ、月令以呂波分惣目録と題号を名づけ別ゝ貫出し——ハ季節ふ用ゆるものハ勿論季節に用ひきゝ〳〵ぬ物ゝそも俳狂の便ゝとみる事又ハ月並艸木魚鳥の異名和名古名ハ聲ふもくづくしくり〳〵いろは分ふ出ス。本書ふ注解のうるぶふしたの又ハ出所の落るる物ハ此目録の條下ふ辨明を本書ふ二處三処ゝあるうゝく委き訳ハ何ふゆるもはうがゝ記物背録ふて見る

をの部 沖津鳥 冬 廿三子

この部 ふゝく〳〵恋し鳥 冬 廿四子

あの部 秋湊 九月北子訳ハ春の湊の所と仮 春湊ふ出

みの部 水無月 六月 万葉集 水無月の出處万葉集 本文ふそちくる故此巻ふ

余も准して知るべし——其外狂・俳・詩・哥の便ゝふる事多く載る故此目録をかりもも會席などに懐中しゝく失忘ゝ備ふべし——

三冬之部

冬の異名和名冬の神等 ゟ十月の初ロにしるゝ

時令

此部ふハ冬三ケ月の時候ふかゝはる事ふしるゝ

冬ノ風

哥ふハ冬ノ風と云 讃ハ冬ノ風ハ寒く吹まゝ故ハ云

占考 冬南風吹ハ三日ゟ霜多し——寅卯の日風ふしハ其月ハ風多し——

(詩) 秋やゝの楷のまるふ冬——引乃山の行ゝしをさひこうやま 式部

(俳) 冬の風傳ふて也野明 ゆ〳〵ふ波もとかゝつ冬の風 蓮二

(詩) 冬風五字對句

同上

黒帝・行威肅・雲岳千岩瘦・飛廉・意氣雄・霜林・萬葉恐

冬ヲツカサトル神 カツタケモ風ガ吹バ岩ガヤセテミエル セイガオソロシイ

カヨツカサトル神ハ心アーダノ木ノハガトビチル イキモスサマジイ

(詩)

出自薊北行疾風衝塞起

薊北トイフ所ヨリ出テユケバハゲシイ風ガ陣ゴヤヲフキタヲスヤウニオコリテキタ

沙礫自飛揚牛馬縮如蝟

スナモコイシモミナヒトリデニトビアガルユヘ牛モ馬モスクンデ子ヅミホドニナツテミエル

冬霧　秋の霧ほどふかくハ為ず　冬のきりハとかく水ぎぶ立

(哥)

きりたちてわたる陽もえんめさわ川よ
きりのくやおもはまのくまるる成らん　基俊

あらし山ふもとをくまなくうつる川きりの
そこふかうもくみのゆかの　為家

(詞)

霧やうけ。千ゑ選ぶ。なえくさむき

(俳)

霧のうち外まるくみえ紅葉の者二水

(狂)

霧ぎりに月はいねようと個代ぶる
きぬぎぬハ恋もかくるとくくり　和水

冬日　黒道ゝて北のうゝをぬく
冬ノ日　あらうまんく日をゝゝ

(哥)

ほゝゝとあたてやのあ[illegible]ひまゝて
影ゆふめくるあそのの日ゆけ　采世

(詞)

ほどゝきうげ。めぐるほどゝき。よハ
日かげ。さむき日うげ。雪ゆうつゝ

(俳)

冬の月や人ゝ舟の城はゝり　許六
冬の月や物ゝ[illegible]のあゆこ　湖春

(狂)

日ふかくるのゝこのゝのゝ
ゝゝうゝんでゆくゝうゝ　鶏明

(詩)

冬日五字對句　同上

忽忽短晝光　漸漸過三竿外

ゼンゼンニ三竿ホドバカリノボル

融融浮和氣　初添一線長

コノゴロハレノラヤノヌニハノ糸一スヂホト長ナル

ヤウヤウスグサンカンノホド

ユウユウウムクハキイドカニシテアタカヒケシキモウカブ

セハしクしテヒルノカゲカミジカク

(詩)

冬日詞　白居易

杲杲冬日出照我屋南隅

コウコウジツイデテヲノレワガオクノミナミノスミヲテラス

暖暖背日坐和風入肌膚

ダンダンハヒニウケテヒナタボコヲシテ日ニトホムイテスハレバ

ヘニトホレヒラナカナ風ガ夕　初似飲醇醪又
如蟄者蘇　ハジメノホドハヨイサケヲ春ウニアツタカノチニハウゴ
イテ井タモノガイキカヘツタヤウニナツタ　外融百骸暢中
適一念無　カラダクソハコヨウ元ニデカウガシルヤウナリ心ノウチハ
ヤスラカデナニモ思フガナイ　曠然忘所在心與空虛
俱　何トナク心ガヒロビトシテカウ云ヒテ井ルコトモワスレテコヽハ虛空ト オナジヤウニナツタ

冬日故事

唐宮中ノ女ノヌヒ針ノワザヲ以テ日ノ長ミジカヲコヽロミハカルニ冬至ノ後ハ一日二糸一スヂツヽ多クヌハルヽト云リ　唐雜錄ニ出

冬十月　△月さゆる△月をさまゝ　枕草帝ハ老のけしきふかたとへ　くもりなくもてそ紅もさゆる八澄きまれの甚しきうす

哥　拾遺集　友輔

ふるのおほ池の水乃さやけさを月のひかりのとくるとゝ

千載　平實重

夜をかさねひとへに氷の下さえ
こゝろふかくもとめる月の影　大納言經信

夫木

名ばかりよろこびてめる嵐こそ
むへこそ月をく風ふかうさえ　家隆

續古今

なかめつゝいく度袖よ冬の月　蒲丈
叶ふふくるる有明の月

詞　氷こやとる。このたれさがる。消くまきたれ。雪はかるふく。このまさかりぬ。
みたれ芦の末まふ。雪に光ゝ紙とる。
氷ともさゝぬ井。雪ふまれおく。

俳　徳老の名淨天てくる冬の月　蒲丈
冬月やつまるきさ井も松ハ松　其角

狂　そうハとくやこの冬の月の光のけそひそまさる冬の月　貞左

冬の雨

冬の雨　多くハ雪ふまじくるそう

哥　ふるあのもるにそうの冬の雲
嵐や雪ふ吹こほるうん　為家

この里ゝ宋かきくりふゝ函に
外山をこれハまるそつまれる　衣笠

俳　冬の函まゝ考にうる板や　羅人
扉のもゝもいれてさひ〳〵冬の雨　加十

狂　たゞさへも山ハ冷ゝまうゝ冬の函
わゝれすゝこにたゝれおこせと　信徳

山眠

冬の山の姿をいふ。四季の山乃姿をいふる詩あり次ふまるれ

詩　四季山之詞　卧遊錄ニ出

春山淡冶而如笑　春ノ山ハアワサリ〳〵シテ人ノヨメルヤウナ
夏山蒼翠而如滴　夏ノ山ハアヲ〳〵トシテウルホフヤウナ
秋山明淨而如粧　秋ノ山ハサワヤカニ〳〵シテカザリタルヤウナ
冬山慘淡而如眠　冬ノ山ハモノサビシウテシヅマツタコロナリ

右の詩の心を以て季に春ハ山笑ふ
秋ハ山粧　冬ハ山眠ると三ツ出して夏の
山滴を季に用ひざるも俳の掟〳〵

寒夜

冬の夜。秋の夜ハものさ
ひ〳〵さにたゝ〳〵かゝる物なれ

とそれよハやゝかゝりてさむけに
たゝ〳〵ゐる冬の夜のさはゝり　為家

哥　夫木
おのゝ世いろ〳〵星人の夜さむを
ゆめよりおのゝ世いろ〳〵星人の夜

俳　さそれいね　れ　みすハ者ハ支考
前夜や寒しもの　一鼠
寒きおもひハ外山ふまさそん　泉志

狂　さうれもも行ふをくんてきのおハ
あゝれきゝけゝ　道久

詩　冬夜七字對句　詩礎

起看北斗寒垂地　鴛衾冷
俯听長江流有聲　獸炭消

詩　冬夜五字對句

曉角催寒漏　アカツキノフエノ音ガサハイトケイヲモヨホシ
孤燈旋落花　ヒトツノトモシビガヤモスレバハナヲオトス

△冬暁　△さむき朝　(俳)暁や我つけ初る袴のもち　荷兮

(哥)雪玉　折きのもとハまれ添くなる暁のおもえを袖ふおもき月うな

(詩)七字對句　詩礎

屋頭・木葉飜寒・片　茅店・月　ヤ子ノウエヘコノハガサムサウニヒラくトチル　カヤブキノイキノ月

墻角・梅花吐・暗香　板橋・霜　カキノアタリニムメノハナガホンノリトニホフ　イタバシニシモガヲキウタミタ

△さむ空　(俳)さむ空ちらく名ろ付　宙存

△さむし　△さむる　(俳)三日月の一筋さむ　支考

むーいつく爲

△凍　△こぶる。凍ハおる序ごふハ行らぞ寒気ふうくまるるろ

△(白)こぶるハらるとらく訓のころもう

(俳)いもかうの海さ下女岩扇ル　猪柳

△はめたき　枕草子ふつめるれたるいとさむーくるるとつたえゆるうとき

(哥)玉葉　雪を出く我おもふ冬の月風やあれ　山林

(俳)はめ・ごさをたつ・ふかけ・絵施　支考

うのくもあの名せる作はうる

(狂)待今ハつかうきめを温まりあけあくくまるくハいうらくん　悔翁

△雪　異名　△六花　△六出　故事ニ九ツ目ヲ出ス　飛瓊。滕六。玉塵。銀樟。六霙。

雪ハ豊年の瑞とい事并雪女其外雪ニ付委くく天地惑問珍といふ本に出ス

(哥)古今集　貫之

ゆきとうるおりひけぬを木のるうゆきとうるるうくるるふうる

山家雪　定家

待人のふりくのろ絶ぬく年

彩雲の枝くりうるわるうう

田家雪　実蔭

待うるる裾田ひ菴乃枝ひうけ

外山ハうけてくるくもくあき

柏玉　遠山雪

哥 しらくもとえへつる良れねのあたれ雪のかへし山のと乃ゆれ

雪玉 谷雪

哥 暮の雪はしをかくして谷の戸に香乃梢やさえてとしも詠

同 川邊雪

哥 氷の上にふるもつもるは飛鳥川さゝまやくねの雪子及らん

夫木 湖邊雪 為家

哥 さゝなみや比良山下風海にうけくひとりはよるひく雪のたち雪

風雅 行路雪 為兼

哥 旅人の先に行かふあとのみえくく行方よりもまよふに雪ぞふる

夜雪 小弁

哥 夜の戸は明ぬとみえてつくるはつもれる雪のひかりなりけり

夫木 名所雪 為家

哥 行かはるさとの古へを来てみれば近きもさらぬ雪のまさ里

詞 降る。つもる。かきくらし。かきたれて。ちりくる。白妙 初雪 十月の條にくはし

〔山家八〕 柴人(しばびと)の通路(かよひぢ)たゆる。山路たゆる。嵐の松葉埋もるゝ 〔同八〕 ふれどたまらぬ。跡(あと)なくきゆる。氷のうへにつもる 〔風八〕 ふゞき。雪げのかぜ。雪まぜ。又雪ふれば風のたゆるよしをよむらん 〔海辺〕 浪かゝるまで。つりもせぬ。海士(あま)の苫屋(とまや)の埋もる。雪ふれる浦。塩竈(しほがま)。雪をのせたる舟(うき)にも。浪の花とみえまがふ。そのほか高城など白くのけしきいろくよむべし 〔庭六〕 跡いふ。またの人の跡なき。ともすれ

〔木六〕 木々の花。梢(こずゑ)もうづもれ。梅ふきまがふ。千しほの花とまがふ。松乃ちとせの色緑(みどり)なる。梢をいろこそわかぬ。音(おと)も白ふ。余所(よそ)のまゝ

〔深雪六〕 行きくる人もかよはぬ。めづらしあともなし。軒(のき)もうたがふつもる。かしきたく。それ。雪晴(ゆきばれ)。雪さほ。右の心を思ひ土尺にあるも

連　朝きよらきらにはるする物うれ　豊通
雪ふるあやまちの保山のうれ声　紹巴

能　我ものとあり人の恨しら雪の上　其角
雨人よいてこれうらんものうら　芭蕉

雪折ハ引切り牛や鉢乳の湯　宗甫
ふとんてもさほどとまれぬ　徳元

凍るまに法師ハ雪の御ゆ　支考
燈火をきれい風わう炭のこる　蓼太

狂　雪にはるまを帽子に折うぶこ
かしらもさぞれ大ひへの山　宗増

雪ゆゑ中ゝ雪中ゝ雪中ゝ
ひとりねるる天地のうゝ　貞徳

ところ山ゆきそとまこんの白いおまど
ゆうぐゝたとる猫もゆゝ　貞柳

詩　雪五字對句　同上

天地無塵事　妬舞時飄袖
天地モユキガフレバスコレノチリモナイ　ヒラヲヨタムカシテヲリく人ノソデニヒルガヘル

江河有篆文　欺梅併壓枝
江ニモ河ニモアレヤウニ書ヤウニワレガミヘル　梅ノハナノイヲアルムイテエダニデラオシヲル

拂樹驚梅早　尖峯排玉筍
木ヲハラアアハヤサキノムメカトオドロキ　トガツタミネハ玉ノタケノコヲナラベタヤウニミエ

凝陛類月殘　圓石疊銀盤
フミタンニカタニツテアルノハ月ノコツテアルノニ似タ　ニルイ石ハシロカネノタラヒヲカサネタヤウナ

詩　雪七字對句　詩礎

三千世界銀成色　犯長沙
三千ヒカイ中ガシロカネノイロニナリ　長フツイテルイサゴラウヅミ

十二樓頭玉作層　沒樵路
ナニノロウノヤネハ玉ヲカサネアゲタヤウナ　キコリノミチモウヅム

看來天地不知夜　梅花信
カウミレバ天地ノアヒダニ夜トイフコトハシラヌヤウナ　ムメノタヨリ

飛入園林總是春　柳絮風
トンデツノハヤンニイレバスベテ春ノハナガサイタヤウナ　ヤナギノワタガ風テチルヤウナ

雪ノ詩詞

瓊林　玉樹　冷艶　寒光
タマノハヤシ　玉ノヤヘキトミエル　ヒヤヤカニウツクシクアリ　サムクシテヒカリアリ

呈瑞　散銀盃　花意思　鋪作月
ルシテタヨミ　白カネノサカヅキヨフクヤウナ　ハナノコヽロモチ　チニフリシイテ月トミセル

詩 雪詞

終南陰嶺秀積雪浮雲端

終南山ノミヨガタカフミユヒバツモッタユキモクモノハシニウイテアルヤウナ

林表明霽色城中增暮寒

林ノトニハレタルケシキガアキラカナトオモヘシロノウチニハ日クレノサムサガマサッタ

詩 同 柳宗元

千山鳥飛絶萬徑人踪滅

山々ノユキニトリノカヨヒモミヘズイヅクノミチモユキニウモレテヒトアトモナイ

孤舟蓑笠翁獨釣寒江雪

ヒトツノフネニミノカサヲオキナガツテヒトリサムイ江ノユキゲシキヲオモシロガツテウラヽツリテヰル

雪本之故事 香爐峯雪 雪れふくふるたるろろうろうのゆき

はーちく出させるひてかくろろ
のあうさぬいどゆくんとおほせられ
タれバ御前ま在タる清少納言とい
でいちくて御簾を巻上さうり帝
ことの外感じでさせるとうやとれハ
次ふちろ詩の心を合セるとうろう

詩 朗詠集

遺愛寺鐘欹枕聽香爐峯雪撥簾看

コノ詩ハ楽天炉山トイフ雪ノコロノ山荘ニ居シテ東ノカベニ五首ノ詩ヲダイセラレタルソノウチノ第四ノ詩ナリ廬山トイフトコロハ遺アリキトイフテラニチカクカヤロホウノフモトナリ

俳 捲あるますれ内ふも雪の夜 蝦明

雪れ山 雪ふる時ハ藏人所の衆大内ふ參して藤壺ふ雪の山をつくしと一条院の時よりの始て後伏見院永仁のころ迄ハ行しとぞ今ハ絶ぬり祝章帰ふ曰ちるすの千余日のあとに雪ぐ迄うるるを出式部丞 ちるすのあるりれバちるね出しく

おきどのて雪の山ぬ出ちるハぬ不てそ

みなまこ出景のつぶも俳ぐ生ぎり 下略

俳 富士ハ一枝付のるふ付るの山 霞外

雪れ粥 雪のふりたるうぐ藤原仲文院の御所へ參たるに院の御粥

哥 白雪のふれる行くさの白粥を

おろしあハせて哥よあと仰られ々ぎバ

いとよくふるる物ふるうみ辺る

(俳)市雪や世月のすとを椀の粥　東窓

粉雪　ほそまゝく草ふかく粉雪
丹波の粉雪とゝ雪ハ
よねとつきふるいるに似くれば
なう溜こ雪とらくべきを丹波とそ
鳥羽院稲くれくしまゝて雪のふ
るふかく仰られしと讃岐典侍の日記に出

(俳)山風や雪の粉雪さるん賀　呉卿
雪忠梓とうて粉雪とふ〜する名　分香

雪唐故事　**柳絮**　謝太傅安トイフ人兒女ヲ内ニアツメテ文ヲ講論ス俄ニ雪フルヨツテ兄ノ子朗トイヘルニ問テ曰白雪紛々何ニカ似タル朗答テ空中ヨリ塩ヲフラスガゴトシトイヘリ又兄ノ女ニ向フ答テ曰柳絮ノ風ニヨツテ起散如シ安モ奇オヲ賞シテ悦フ世説新語ニ出

(俳)ふるさとの雪これ小つけても場ハ連国
雪と配ル風よりふるの柳　小ハ素仲

蘸雪　蘸武單于ニ使ス單于トラヘテ北海ノ上ニオク食ニ
乏シ卧ナガラ雪ト毡毛トヲ齧テ数日不死遂ニ漢ニ歸ル

放馬　齊国ノ管仲旅中雪フ
時老馬ヲ放テ行クニ任セテ隨ヒ
行バ遂ニ道ヲアヤマラズトカヤ

雪花　△六花。天上ニ瑞木アリ雪
ヲアツメテ瑞木ノ花トス
△六の花とゝハ。草木の花ハ皆五出
なゝの雪のゝ独ア。六出有と月令廣義出

(俳)馬の尾ふるの花ちる山路ハ支考
雪ハ花ハ物ふッ六ッのゝなな文洞

ちばゝと雪　木の葉ちどにつり
△円　たる雪のさらくとを
つゝとりくとふ〜つり

(俳)ねておきぬ名をゝとゝろ花ちつを荷風

雪肌　世間美人を賞とる言葉
△　もゝとも雪をあらはしてもちる

語なきハ随分季とするべし これらの事ハ衣うつの例もあり

△雪空（ゆきぞら）○雪催（もよ）ひ○雪気（ゆきげ） (俳)雪空を 見るの耳ニ郭之 一品

鶯と思ふとかりハ驚さるの空 梅五

(哥) 風さはるをおもれる雲れ寒めりく 月ふるけの空そうきけき 為相

△雪声（ゆきのこゑ） さびしさに窓うつ雪に帰る音（おと）をいへり

(俳) 又ふれハ垣ふ裏表なりゆきの声 嵐雪

(詩) 雪聲詞

沈（シヅマル）・石（セキ）泉（セン）凍（コホリ）合（アフテ）・竹（タケニ）無（ナシ）風（カゼ）・夜（ヤ）色（シヨク）沈（シヅマル）

・萬（バン）境（キヤウ）空（ムナシ） イシマノイヅミモコホリガ ハリツメテタケニカゼノオトモ

セズヨルノケシキガモノシヅ カデセケンガヒツソリトシタ ・試（コヽロミニ）・向（ムカフ）静（セイ）中（チウニ）

閑（シヅカニ）・側（ソバダテヽ）耳（ミヽヲ）・隔（ヘダテヽ）窓（マドヲ）・撩（リヤウ）乱（ラン）・撲（ウツ）春（シユン）蟲（チウ）

フトモノシヅカナウチニ耳ヲソバダテ、キケ ハマドヲヘダテ、ハラ〳〵ト春ノコロムシガヤ

ウジニアタルヤウナオトガスルユヘ アノヤウニミタレバユキガフルノデアツタ

△雪消（せつけし）(十一) 昔（むかし）ハ雪多くふる時ふ餅（もち）弁（ならびに）菓物（くだもの）を互（たがひ）ふ相（あひ）饋（おく）る

これを雪けしといふ是を喰（くら）ふて寒さをわするゝといふ心なりと 日並記事ニ出

△富士雪（ふじのゆき） 富士ふハ四時雪ありといへ 御傘ニハ雑とし又通俗

志遮哥（しやか）ふハ冬とし此事大ふ論あり委く補遺ふ出し

(賦) 雪中之文

朔（テウ）来（ライ）六（リク）花（クワ）呈（テイス）瑞（ズイ）彌（ビ）望（バウ）為（ナス）一

色之瓊（ケイ）瑶（ヨウ）来（ライ）歳（セイ）之豊（ホウ）可（ベシ）知（シル）

矣差（サ）拙（セツ）畏（オソレ）寒（カン）徒（タヾ）倣（ナラフ）袁（エン）安（アン）閉（トヂ）

門（モンヲ）擁（ヨウシ）炉（ロヲ）唯（タヾ）仰（アフグ）神（シン）仙（セン）来（キタツテ）賞（シヤウスル）之（コトヲ）而巳

○書晉ハ寒氣。歳暮の條見合すべし

(妙薬) 寒中の雪水を貯（たくは）へつねに用ゆれバ一切の熱毒を解す

雪中（せつちう）夜寒（よさむ）手足こごへぬ法 ○胡椒（こせう）を二ツニ割（わり）わうらくいれ

こがし紙ふく氣のぬけぬやうに包ミ贈りあてよし

霜

しも 朝霜夕霜といへど多く暁がたよりおくものなり

(哥) 新古今 (歌) 霜さゆる山田のくろのむらすゝきかる人なしにのこるころかな 慈円

夫木 (歌) いつしかもかものゝうひのしもやおきぬらんきのへの?経もかれはてぬる 俊成

同 (歌) 一方にえしうちそひしきたへのまくらにうすくはらふ霜かな 定家

同 (歌) 秋ちかくまたつまきうきさらさの松のちよまでもむすびそへたるかひはありけん 後九条内大臣

拾遺集 (歌) おほわたのまたくもふやけさはまみのよふかれしもけぬらん よし信

柏玉 曙霜

(歌) すゝのやまきんかさくもえる人やそるき野への霜のあけぼの

同 朝霜

(歌) 我宿の里の上なけれる朝霜やさく一むらにふしえておく

(詞) 結ふの霜。霜の色。霜の枝じ。霜秋の鐘つるハしもよるといふて志きりまつでさきとくるものなり

霜の花。霜のむら消。袖さむし。

霜秋をつゞる鐘の声 霜秋よハふるの音とのなり

霜朝く。身に寒く。雨の野。かねのおと 故郷の宿 次の出に 白髪をいうなり のしもと同じ

霜せぬ霜。秋ハつま茎なく。むのうてな 霜とげる 秋の末ふ又ハ秋とられのうれ霜の霜ふるくとるあやめてあるなり

鶴まく霜。血のべ。たまでのうへふねく霜。霜かふる霜のけてふるく 霜げしら 次にある

(連) 声たけてきるゝ霜の鶴見る 宗祇

風さへの霜にしも秋のひきつふ 仝

(俳) 一ツ家や一まつくの古鶴の霜 支考

霜の秋やことねの岩にも猿叫ふ 自徳

(狂) 僕ゆよゆく霜ようもうさまさひかのおもむくきえてゆく 貞徳

(歌) 為うむとハ猿といへし秋く霜のあからくしみ冬せるあしれまふ 貞馬

霜之故事

鄒衍哭 スウエンコクス

鄒衍(スウエン) 惠王(ケイワウ) トイヘル人(ヒト)ニ燕(エン)ニ ツカヘテ忠心ヲ

尽ス左右人是ヲ拒テ謗言ス主怒テ術ヲ獄中ニ入ル術天ヲ仰テ歎ナキヨシヲ歎ス夏ナレ氏霜大ニ降ル淮南子ニ出

鐘聲　唐ノ豊山ト云ル所ノ鐘ハ霜フレバ自ラ鳴ルト山海經ニ出

鶺鴒霜　霜降ル時ノ鳥ハ三四ヶ日ニ一度ノ霜ヲ喪ル

霜柱　寒ツヨクナルトキ谷ウチ又陰地ノ野辺ナドニハ高くもりあがりて柱を立るごとくなり

俳　あさへもかる柱と幸の神　金波

哥　天木　公実　ふき岩屋ふりてる霜柱　作者ヲクラル　行家ウタ〻ん　光俊

霜花　三ツ花。霜濃く屋上ふれば皆百花の状あるをいへり。三ツの花ハ水の花の轉音なり又雪を三ツの花と云や霜を六の花と云也霜を三ツの花と云やは

俳　春ヲ待日数ハ多し　霜の宮　冠柳

霜氷　霜の次第から氷る　言水

霜夜　俳　人さへも指ふ動ゆるぬ　言水

哥　古今　ふるのしらゆふ夜ハ人ふねさのそのさやくもあよところひとりぬる

はだれ霜　哥　天木　公実　雪ふ同じ　上月に委し

はだれもふるあのよハ雪のうハ毛もいろふさ面らん

氷　厚氷　氷花　氷衣　薄氷　氷面鏡　氷の和訓　氷の異名

むしハひとい〻ハ後ふこほりと三字によ事ふ事ふ多くこほりのひもがみハ氷のてりくる面が鏡のかうに見ゆる故ふ名づく氷の花ハ氷を花と見ゆ〻るる氷の衣ハ池川おそろしるぎぬふ似るようふ氷

哥　つけしよとのわくろをなさミれいとけんこもあくおーふろう兼盛

氷ふやふおとくらんかのこのものふふふのさくるのるれ　行資

氷の花ハ氷乃さやけきハ月のいろのみうくろう　ゆきみ

為尹

續古今　谷氷

ひくらもなく氷るころかな

内大臣

新勅撰　湖辺氷

なつのゝうゑ水のうへをゆくふねの
はもとあるよとやうたん

柏玉　葦間氷

月はをへゝ水のうきぬかけ
あしのしたをもはやくちぬき

小侍従

夫木　薄氷

けさハしもそるけしきのうけも見
野せのかゝこ屋水しゝ

詞　よをへて水のる。嵐ふかるの後ハ落水のうきをゝ落き水の底のかゝこ。

入江。山陰。水の袖。風代。音高たき。山川。ふし栄。波の入こ。ねさす。波の面。水結ふ。汀の水。ゝ。舟もよ波。うハ波水る。波さゝく。ゝしの羽風。むとふ芦。

連　ゝゝをゝ見るハ水のかゝこ宗祇

俳　深い波をけうくも水沙　白羽
ゝ間まあれいと瓶の水沙　正秀

暖ゝ水ゝて水とまむ水多嵐雪
流腸や水の中ゝ水ゝ松　其角

狂　水うゝの上も氷のうゝ
ひらのあくまもくゝゝる日吉入安

ゝとゝ波よ結ひしゝゝ
ゝくもうき水の反くあやし十慶

詩　氷七字對句

詩礎

寒生玉指紅先透　寒侵玉
光遂金刀翠欲消　冷浮銀

氷ノ故事

狐聽

河水氷ル時狐是ヲ渡此後人モ氷ノ上ヲ行ト　述征記出ク

○本朝信州諏訪ノ湖モ氷厚クシテ人馬氷ノ上ヲ往来ス先ツ狐来テ渡初ル

ヲ見テ人モ行キ通フ春氷解ベキ前ニ狐帰ルヽ是ヨリ人モ不渡トイヘリ

△**氷聲**　氷をさく声なり　氷をくだきて氷をさされくぶき又舟をさすにさく棹にてもうつ之此音をいふなり

（文）楊延秀擣子敲氷文曰

擣子金盤照暁氷彩絲穿取當銀鉦敲成玉磬穿林響忽作玻瓈碎地聲

コトモガウツクシイボンニアケカタノコホリヲノセアテヲアケテ五色ノ糸デククリギンノドラノカハリニシテタヽキ玉磬ノハヤシヲイヅレヤウナオトヲサストオモヘバギキニハリノタヽカ地ニオチテクダケルヤウナオトガシタ

△**露氷**　露結びて霜となるをいふかぶとく厳寒の心なるべし

△**鐘氷**　かねの音のさえて氷るが如きをいふ手足の氷るとのふも手足に寒気の入て氷るがおとれをいふかねも是におなじ

△**氷の轄**　氷解るかなり　八雲御抄に出

（哥）夫木　為家

別ある事て八田川よふてる水車わのくさしうちそくなり

冬之混雑

此部ハ日今時令草木からとれてらきる品どのをあつむ

炭　（別名）烏銀　（種類）△切炭△池田炭△炭頭△輪炭△炭團

右の外種類ハ次に記す今摂州池田の辺にてやくりの池田炭又切炭といふて日本諸州の茶人このむ此ところの炭を用ひくぬ木にてやくといへりくぬぎ炭ともいふ

△輪炭ハ池田炭の大成物を薄く切たるもの形車のごとし故に名づく

△炭頭ハ炭の俵一俵の内に十五と大かたまりのあるをいふなり

△炭團ハ炭を粉にして丸くかためし物

△**炭竈**　△炭焼△小野炭。和哥によむ炭がまの名所ハ小野山城をしはら山同常陸なるどなりより川とて小野炭といふて

○炭がまハ山のかたそハに穴をほりかまをぬりて薪を多く入まとく炭ニ焼つ

哥 拾遺集「題」山本を路ある中よりまたれつ
あらくさむけれバぞこするふ煙の絶 好忠

夫木「題」そられの炭やき衣きられぬとて
人とはへのためむものかハ おもしろく

詞花「題」山ふかくやく炭かまの煙こそ
やるかくすけるの雲となりけり 匡房

金葉「題」炭かまにけふたくさんハ小野山に
すみけるの雲と見えぬなりけり 師時

新古今「題」日数ふるつもるけふや更る炭かまの
たかうきひとしき大原の里 式子内親王

詞 をのゝ本。すみやき。たかうさむしき
ところの山。桂の下ぶし。あびくけむ。

たかうふくりう。このあるふきふる。けむを
ふきしく一風。炭竈衣。炭竈なかつ。

○たかうきまのぼる氣。家をとよ深ろう
見ありたる炭をよむ宇氣はまれ

年八十とにたきやかるすしよかり

俳 炭やきの跡ふて氷もおもい 支考

「題」炭かまの山隠るも炭となり 忠恕

大原の炭ハ女房も世話とやき 秀信

狂 白妙のよしれをきてゑんかうても
そうりよかゝる小野の炭かゝ 家卿

詩 炭詞 東坡

豈料山中有遺寶 山中ニコノヤウナ宝ガオイテ有フトハオモハナンダハ

磊落如瑿万車炭

流膏迸乳无人知 シテウルシノヤウニツクロナアヽタノククルニノセテ出ルスミシヤ

陳二清風自吹散 モナカッタテアラフガ コノスミヲタケバアブラヲ流シシルヲタギラスコトヲシルモノ

根苗一發浩无際 リヅヽノキヨイ風ガイキリヲフキチラス ヒトシキ

万人鼓 コノスミヤク木ガハエルコト八根モミハエモホウズモナイコトジヤガ

舞千人看 アヽタノ人ガヨロコンデノチニハスミニヤカウトミナノく目ヲツケテミル

投風潑水愈光明 炭ニヤイテ火ヲヨコスコトニ風ニ向フテ水ヲカケレバイヨくヒカリカヽヤク

爍玉流金是精悍 火ニヨコツテカラハ玉ヲモトロカシカ子ヲモナガスホドナイキホヒモアルモノジヤ

炭之故事

胡桃炭 唐宋ノ世ニハ炉ノ出ル今ノ人ハ用フルヨト

獸炭 唐ノ羊琦ト云ル人炭ヲ獸ノ形ニ作リ酒ヨリ出ムトカヤ

△製法ハ炭十斤鉄屑十斤合セ搗テ糯米ニテ子リ乾テ用ル時ハ火キエズ

榾 △わゝ火△骨薫炭 ゝのかくいハ株杭ゝ木の根を灰の中ようゞ其上ゝ火をゝけバ自然ゝ火ゝ付ゝく山中ゝど埋火の用ゝ哥

おもわゝのうゞ付ゝ火ゝどゝろ

(俳)ゝ炭百歳の祖父やかゝい炭 左東

廻炭 炉中ゝ炭をゝむ禁昔のたゝ

△はゞゝわゝゝの置ゝる炭を

あげゝゝ客人おゝしゝくゝふ置ゝをゝゝをつゝ

(俳)二の猿のゝゝれを亀ゝゝすゝ其裔

白炭 。花炭△枝炭。多くハ鄭

△蜀の木をやゝく灰中ゝ埋

ゝめまゝバ白くゝるゝ枝の形ゝ。色枝

炭ゝもゝ。河州北の瀧ゝくゝくゝ

花炭も同所ゝゝ出或ハ梅の花も

ふゝゝ竹ゝ葉ゝもゝゝ存ゝ名品ゝ

(俳)白岸や苔ゝゝるゝゝの枝 二柳

賣炭翁 △炭賣人ゝ(俳)歳暮や

翁ゝの淚ゝ曇ゝ甚

(詩)賣炭翁詞 東坡

積火変深黙火ニ上レバ牙角ノ

猶怨怒ヤ角ノヤウニナツタ火ノ

イキリタイカヤウニエル

炭斗 一名烏府。炭入る器ゝ

△ふくべ又ハ籠ゝいろくゝ

助炭 助炭ハ炭をたとゝると云て

炉のゝゝゝしのことゝ

爐 △囲炉裏△地炉。炉ハ今茶人

の用るハ方一尺四寸ゝ。山家の

ものゝ又褒国のものハ其製大ゝ昔

堂上ゝゝゝも其製大ゝゝ

埋火 △炉火。哥ふ炉火の題ゝハ埋

火と詠ゝ。又ゝの訳ハ前ゝ出

(哥)夫木「山ゝのゝくゝは心合せ埋む出の

ゝゝもゝくて世ゝもゝゝれ 俊成

埋火のおくられやすみのさよふけ
こまろふうぬるひのもすきえ　式子

(詞)　うきおこし。埋火のこと。炭ごと。
多屋　埋火のおくふまろ
ゆくうをさくぬ。ねざめ　源おこし　かきおこし
こし　暁ふし　潤る。こひごちにかる。
埋火のもと　炭のもとと　元ふし　おこし
こごるし。むきの埋火。きえやすしでぬ
思ふ。うへをつまこおくトにこごるし。
述懐　埋火のいきくうひをたていきてえ
りふしぐしぐ火のきえぬ　わきばえ
をしもつくしひのくさをくいつ

(連)　埋火帝本のトつしをもはし　昌休
うつみ火よひくく扇やまるの窓　紹巴

(俳)　埋火や我と二人のうけうし　其角
埋火やねるひるおのいろり　支考
埋火や弓ゆこそ　女　許六

(詩)　炉ノ詞　楊審

天地風霜日夜新　天地ノ間ニ風ガ吹タリシモカフルガリ
シテヒルモヨルモ
イソカシサウチ　地炉穏坐煖如春　ワレ炉

人イヨ〳〵ハヅカシ思フ　ハコノヤウナトキガクモン
スル人ハドノユキアカリデ書ヲヨム人モアレフ

(詩)　炉七字對句　詩礎

客來寒夜火爲媒　且呑一盞
サムイヨニ客ガクレバ炉ノ火ヲ　カヘノミエオトガ
チサウニスル
煖酒仍將半栗煨　蚯蚓鳴
サケノカンヲシテサカナハヒヅトクリ
トヲムシテ出ソウトオモフ
塗炉緣　春ハ小こう立西ふ木地の炉
緣を用ひ冬ハ是を用ふ
火燵　羅火燵。こたつ。
し近世の好こうべ

(俳)　侍ハ抜さ入切るふこたつ　支考
愛第ふ猫さいさ思ふ炬火燵　今
世ふれ〳〵の世人加ふる巨燵　許六
押入の抜こうのりん炬ふる　恵州

(狂)　椎柄へ行ふ人おろう抜らくへ
ぬるさ〳〵ふこたつ　楊州

△火桶　△桐火桶　△火鉢。火鉢ハ近世の名なり。火桶ハ昔よりの名なり。今土あらく作るを火桶と唱ふ。しかれども昔ハ初しもべて火桶といへり。

哥　拾遺　冬ハ物ごとに人ものうくつまるなれど人ものうくつまるもつるべや

俳　抽ヲ名火桶ふかけるの嬢茶竜　冬ハ物ごとに人ものうくつまるもつるべや　柳素

狂　おいとぬつまるきふく　桐火桶　南和

△手爐　俗よりいふ　△懐炉　△手焙　小さき火鉢の事なり

俳　一役ハ炉のはなれも青飛

△湯婆　腰婆。銅又土ふてもつくる　湯を入るる器なり　夷を

哥　拳白集　冬ハ物ごとに人ものうくつまるもつるべや

俳　わらくふたん金を人ものうくつまるもつるべや　東白

の伽口を閉たるうんぽる　夷山

△衾　△敷ふすま。ふとぬハ卧具なり　寒夜ふ引うちかぶりてもさえ

ぬるよりもをのれ又厚ふとぬかさねて寒夜を忘れしはとよむ

哥　さびやかおいあつまるあもいちうた　風もたちもあ麻て小ふとぬ　家房

夫木　きりぎりすもあ麻て小ふとぬ　家房

みちふよりせは寒うしぬ　忠房

詞　△小ふとぬ　△麻ふすま　△麻の小ふ　△ふすまの金

△あさで小ふとぬ　△古き金　△麻ふすま　△ふすまの金

△ちけの小金　△ちけのふすまの金

きぬぎぬ金。やふげの金。ねやの金。ふとぬの下に

ぬる金。蔦紅の夜金。ふとぬの下に

かひとき金。夜のあきの金。いそ金

俳　工夫の紅もふすまく金　荷

詩　衾ノ詞

龍紋巧織呉綾美鳳彩新蜀錦香　龍ノモヤウヨオリタテタゴノヒニアヤ　ツクシクホウウライロイトデオツレ

ショクヅウノニシキガヌキタツヤウナ

燕寢霞時篭翡翠合

歡擁處效鴛鴦

フトリノモヤウモコモツテアリ婦人ヲ一カブレバヒスイトイキヲキレハモヤウノヲシドリノヤウニハルヤウナ

蒲團

稲こゝ芦の穂ゐど入れ

△蒲團とハ蒲の穂わゝ或

俳むかしてとゝろ芦ゐの木綿ハ近世の事〻

△るものゐ木綿ハ近世の事〻

狂きく坂東のあさゐかつくゐるゐと

ふゝんよゐをわゝりかゐりゐ　千竹

△紙衣ふとん△紙衣とをう

紙衣

△紙衣ふとん△紙衣とをう

老人の著てかろくてよく風

をふせぐゆへよ製とるゐう

俳ゐるせ〻ゐのきゐゐや紙衣ゐゐ其角

頭巾

△丸頭巾△角ずきん。浴樂づきん四角み仕立ゐゐを帽と

△丸頭巾△角ずきん。浴樂づきん四角み仕立ゐゐを帽と

いい丸くゐ〻らゐゐを帽とゐふ漆

でぬゐゐるを冠とゐふく唐令ゐもろ

くの時服をたまふ冬ハ頭巾と故

とゐゐこれハ礼服をゐふゐゐゐ

日本ゐゐくハ頭巾を著ゐく人ゐ淳、

事を無礼ゐゐ

俳頭巾と、挑かゐゐゐ穂改支考

老の夕のきゐぬゐるも改巾ゐ五樓

足袋

△堂上ゐゐ四天ゐゐも召ゐ

△民間冬の用ゐゐ

種類。皮足袋。刺足袋。木綿足袋

。雲斉ゐび品ゐあゐ

狂我乃〻ハゐゐ華〻ゐび

苔ゐゐふゐねの棹もゐゐ若室

綿

△綿打△綿操△延綿△唐綿

わゐのゐけを三秋の部綿取の條出

束綿

△綿つむ△臂綿。右、づゐゐ

△ゐゐ作れゐ形ゐゐて名づ

綿帽子

婦人の頭巾ゐ婦人頭ゐ

△いたゐくを礼ゐ

羅ゐを用ゐ冬ゐゐ綿を用ゐ

俳猩〻ゐを女ゐゐゐ絡帽ゐ山盲里

狂紗帽ゐ小ゐものゐれ惰〻〻ゐ

二八の肩乃山のいゐゐき　與

△綿衣　真綿ふてゞ色ゞのぬく製ふ物なり名りと付て冬の下着に

△水洟　寒氣の節鼻より水乃ながれりの出ること

△胼　寒氣の節人の手足に成る病へ

△皸　いの甚しくて口のひきて切るゝときゝ

△寒瘡　冬手足耳なゞの赤くゝれるとり ふいづれも冬の病すう

(俳)ひきゝ氣ふ垢をなりてひうゝ猫の耳　松子　其角

乳房やひさふ動うゝ猫の耳

妙　霜やけハ蛭の売身ともに貶を

茉　火ゝうけ其汁のひつきとうけてよ

○胼ハ山蜂の巣の黑おゝ飯つぶふて付る○冬代の皮又西代の皮の子したるゝと胡麻の油ゝそ付るゝ入ゝ

てもよ猶くしくハ妙茉博物茶といへる本に有

冬艸木

(十)(十)如斯印ひる八十月又ゝ十月の季ゝも用ゆるものゝ

△薪　なきゞハ四季ともに伐ゝふゝ

ど哥ゝゝ冬の題よゝゝ

△胡蘿蔔引　本艸綱目ふ已元年始テ胡地ヨリ來ル

根ノ形人參ニ似タリト故ふ本朝ふて名づく

(俳)ゝんゝんの色ハ細ふ形四ひゝ一海

(狂)ゝんゝんのおりひちて色ふ出て

つひよ色ふふふふゝゝゝる　貞柳

△葱　冬葱△葱ふ○ひともゝ

(古劇)紀　(名)乾艸根ふ

く入ゝく陰ふゝゝ根をゝゝゝ又中

四ゝよ葱ふ又葱ぎかゝゝふ又中

空なる色ゝひかゝゝふ又

丸く長くゝゝ枝ゝ故ふ一文字

と名づく三才圖會ふ出ゝり

(俳)ゝゝハ蝶ハれてねきの白髮ふ青袴

(哥)職冬哥合「つゝふゝて枯もゝ冬の

ゝひ色ハ色ふ色ふ色ふ色ふ色ふ色ふ

△枯野　艸木ともゝ冬枯ゝる野ゝとゝ

さひしきゝ景色ゝとゝもゝ

(哥)いろくゝの花色ゝのくふ立出しゝ

かまくゝゝゝゝゝれよゝれ　有宗

草ハ冬枯れて[illegible]
いうよすまうのさひ[illegible]うん　安俊

(俳)　枯れしてのこすおなじ雀の首　文考
枯ぬふひうこめけ　東史

(狂)　枯ハさもむさ[illegible]のひろくと
哀感忘れぬさむさ[illegible]　京景

枯野　枯野ふ同じされども[illegible]ハ
木艸の枯枯する野をいふ

(寄)　万葉[illegible]
とをしるなるふ　赤人

(俳)　[illegible]枯を[illegible]の後　騎雀

冬木立　冬ふれる枯木のもとをく
いふり多くハ十月の季とす

(俳)　花[illegible]ハさひ[illegible]　朝三
[illegible]　昆吾

寒艸　冬の草。秋よりうれ残
[illegible]　素秋

霜の下にある草をいふ

(俳)　[illegible]　貞吾

冬生類

此部ハ三冬ニわたる生類をあつむ

鷹　古名　くち　和名　かゝ　鳥　截玉集出　篠目ニ出

種類　兄鷹　弟鷹　鶻鷹　鷂　兄鵰　鴨鷹　雀鷂　雀鷂　集鵰

燒鳥。鵰ともいふ雌の雄ともいふ此鳥寒夜ハおのれが足の冷るをうれへ小鳥をとりくつろぎ棲ふわるい[illegible]
朝この鳥をくゝみたゝ[illegible]
[illegible]に甚飛ひ[illegible]
いつりこれ天性の義なり

角鷹　たゝの大さ[illegible]て○鵰[illegible]
[illegible]大
○鷹の[illegible]ハ四ノ三十五丁メ七ノ廿九丁七ノ五十丁等にくわしくあり

(俳)　[illegible]
[illegible]　文素

(狂)　死[illegible]
いき[illegible]　貞室

○右の内ハこのうハはいうさ[illegible]ハ[illegible]つ
さい等ハ小鷹也秋ものを当月の[illegible]見合へし

大鷹狩

△鷹狩 △鷹野 小六 うゐつかひ小鳥をとるを秋なり大鷹をつかひ大鳥をとるハ冬なりされども鷹狩といへバおしなべて冬とこゝろうべし

㊢ 夫木 俊頼

あらたかのとりかへりすゝかのこゑのみぞふるしてしけり

ふさきたる ひとのふききへ宿とくも日つらのみかりせでややまめや 国信

狩くらし今宵やかたちもかりのやどをのみかしえの雪れて下おれ 雅経

㊞ 狩くらし。鷹かり。かりぞ。かりてす。ふのあわきをけしなり。あしぶの雪る。やかた尾のたて尾のふ矢のおる似たる人の尾形の様の羽る似たるのされの雪る。たまきの雪る。とちくるたち。そとらる雪る。そらかくをちとをてとちくるなり とくへる山より処くるみよりれつてさ たうの右のねをさ なきさ 左のねをとつへるふさの羽 尾のくさ付よう狩なりうをとりさ 鈴。とでの雪る。あまりて終 なくなるまで甘ハやき

あらそんとぶちまいの羽つかれの雪 ひくある。山のくつれく立とる山のつくまで きのくりつ 草かられ そとの村に かられたきとらし とらくさ 出狩。せこの羽 こゑ こね。ぬすえなる。かりぞれ雑子。いつ きのこゑり 禁中へ毎日さよのなりまゐらなり の こゝろり 降ふ六 かりぞの小鳥 つゆ 落されて なきて 夜るえの雪 おほやけ

枕冬ふ六 狩場のをのくちの空 かりたふハ今その月 きみかりふ六 あしくらのいの上ハ かりぞの雪る 宮さまのくなりのうち 気いろくあるべし 雪 狩場のハやるをかりくよみ合せてつ 武八 ふりかるふるも冬ぬるしといひあらふの たかの狩出てかしくもなまめり

狩場の名所ハ春日野 大和 交野 河内 甚外おもふれる。狩の総の長きハ次ふあるれ

㊥ 大宮てもぬ狩くりて夜与其角 深くるまへ乗りてうぬくめる 簾光

㊟ 鷹狩七字對句 詩礎

新豊樹裡行人渡・騎似雲
新豊トイフトコロノ樹木ノアイダカラ人ノユキ、ガミエル。ムニノリガクモノヤウニオホヒ

小苑城邊獵騎廻・帶禽歸
小苑城ノアタリヘタカガリノ人ガ馬ニノッテカヘルノデアッタ ミナノトリヲモッテカヘル

詞　鷹ノ詞　　無名氏

故鷹　制鑁　北風　迴草　盡

平原　使馬　開　野ニ馬ニテ狩スル　タカノモトヨリ風ニナヤブル冬枯ノ

臂上　角弓　如却月　ノゴトク　タカニトラセユミニ射ナドスルカリバ　イサマシイモノジヤ

當場　意氣　射　生來　ヒナ　カタ　メル弓ハ月

追鳥狩　列卒　出一　くくる　鷹ヲ追ふ

狩場の雉　鷹におゝる　木居　止る　木の枝

鳥の落艸　落艸　鷹ホ追れ　く小鳥の落る所

の艸　落草　むらみてむたら　がの事ふちぐ　ばかすとなる　藻類　艸ニ出

力草　たの鳥　ちくにつ　むをいへて

はたの老の立　みのたち　てのむ　もたれ　行史

教草　鳥ある所　ちう　の鳥　落草

ところを落艸　其落艸の人

を羽をひいく　ちくとる

ぬす立　ぬす立鳥　鷹狩ニ鳥の　ぬき立鳥　おそれて艸

おどにかくまてる　又たふはひく艸のかげを飛　そうふ飛

鳥立幕　鳥の立所　所へ狩人の　ぬくなり

寄　新古今五　のハ行　埋まくそちもえ　まくれて　匠房

鷹匠　たくをつく人　鷹師ともいふ

列卒繩　せこハせむる子　まく追ふ　ものをい

鳥叫　鳥とぶ　枝折　葵出　又狩人の声　ばげくたら

追立る　ふ鳥のさけぶ声を

聞く鷹人のたくをとぶ

鷹犬 △狩杖。鷹うりの云ふ連くゆくく犬と鷹犬と云
狩杖ハ鷹狩のとき引ゆく犬ハ
いやしゐるたくよりハ杖うり

千鳥 正字衡と書異名いそ字鳥
。言葉ふてを用ひ来ル
物ハ鄭の詩の條ニ印有見合べし
。千鳥ハかもめ類にてせきれいニ似て
小ハ川。海。入江等水辺ニ在て群を
し沼ばゆびくゆ千鳥ゆふ

哥 タなれハ佐保の川ふの川風ふ
友ちとりくくちとりくく 友則

風ふ吹ハ波ちとりくくん
タなみくちとりふ五百ちくなり 顕仲

柏玉集 月前千鳥
月ふうれハ秋ふて月の友ちとり
くくゆちくくも浦ふくいしそ

雪玉集 濱千鳥
よるなよりかよいうふ友ちとり
月もまぶもきよさ浜也に

同 泊千鳥
ちくくみる月もかりし氣ふ
みふりあるくさよるのとり紙

同 湊千鳥
ふちとさす久波ちとりくくん
よとうふへくゆふれもちくらん

碧玉 岸千鳥
月ふ出るあまてもさを礼ばつれる
ふねよりきくれふるちくく

詞 △川ふる ふるゆく △村ふる ちくゆく
△小夜千る ちとり △志ふる ふくなり
△浦ふる △浜ふる △波千
る ちとり △友ふし ふる てちくとり
△ちくちどり △タちどり △ゆるふる。住
ちどり。ふる。浦ふる。ひとなり。
やちふちく。よびふと。也れかつ。
をざるゆ。浦ふひ。ふるとわ
る。たりふる。たちねちく。とも
ゆくふ。ぶがひのゆ。友うぢちどり。ふね
ほれ。かくもさぶゆ。やちとと唱。

蒸　ちどりの書こひふきあれはうそ　ちどりおるとおすいをおいまむころ
書こふ。書こふをる。書こふをる。あるーちとう。

旅　海辺のよびよりあるの声ふいとく
波枕。波のうきねのおすいをちるよーちう
波枕。波のうきねの鶴さえ夢の破まで。

○みるのはふ三条の面白きんをいひ
この鳴者の音源くおいれるるころまも
り。遠ーて水辺のるふよむられバ川の
名海の名水辺のあのふよこ合をべー

○海ふくふ波のみ川る時ハをくうり波
のひる時ハをたびう波ふ添て鳴あ

連　塔ふ千年経ふこへうん川ふる　紹巴
ちとさうぶ行いやそうな友ちとう　仝

俳　ちくみるなるぬちとうや舟の行呂春
立波のあふきくちくたちとうふ　嵐雪

狂　ちよくとみちよくと友ちとう
渓のまんこみつきぬ行うみ　良柳

鴛鴦　異名　匹鳥。文禽。雄を鴛
△とりひ嶋を鴛とう水の

上ふたうそふおとをも又水よねる
事をもようりつひえをまたちど
ア深きハ此鳥の情なり

哥　新古今集　経信
ねうきうるーちさもつくよう行ふふ
ねうきうるをーのひとうね

金葉集　前斎院六條
中ーくにねのうたの羽をねくや
とーの毛衣さえうるーん

夫木集　越前
海きうん山田の奥ふ小夜ふく
はまちあーうふきーのうふ

詞　とーのつひ。ねがひの毛。うふひて
ちとふ。玉藻の床。とーの村る。とし
鴛　とーのうん毛ふ深ねのとし。ふひのとし。
とーのうん毛ふ深ねのとし。つがぬとーのひう
ね。とーの毛衣。何ハ水れるの所を会とし

連　宗祇ふひまふて紙をの羽ふ　宗祇
俳　宗ふとハ紙ふ中ふ　水尾
ふるふ中ふ　いつも細をハ　里中

(狂)ひんもくの女王の色きらい
為ゆへ〳〵くるせんくの神　芳室

(詩)鴛鴦詞　古師孝

江島濛〻烟霭微緑蕪深
處処毛衣江中島ガモヤクトキリデミエ
ルフクリニオンドリガキレイ
ニモゴロモヲセツクロフテ井ル
一雙去飛上文君舊錦机シバ
ヘ人ガクレバソコヲオドロイテタツテメオトヅ
レブトミフユクハサダメテ卓文君トイフヤウ
ナウツクシイ女ノオツテ井ルニシキノ上ヘ
イテソノニシキノモヤウニナルノデアラフ

(詩)鴛鴦五字對　同上

文采負奇色
イロクノウツクシヒモ奇妙
ナイロヲ負フタトリジヤ

和鳴多好音
夫婦ナキカハスヨイ
コヱガ多イ

白頭心共在
ハクトウコロトモニアリ
必ヒノフンドリハ死シタガヤ一子ル・キハビヲ入チガヘテイ
デトオモフ心ヒニアルトリジヤツモニロクハラスモイト三ヘル

交頸意何長

(鴛鴦故事)韓憑魄

大夫韓朋一名憑ト
云ヘル人ノ妻甚美ク
康王コレヲ奪フ憑怨テ自殺ス
妻コヲヲ聞テカナシミ或日王ト
臺ノ上ニ上リテ遊ブトキ臺ヨリ落テ
死セリ懐中ニ書アリテ憑ト一ツニ葬ル
ヘトシルセシカド王ユルサズシテ塚ヲナラ
ベテ別々ニ葬シカバ一夜ノ内ニ二ツノ塚ヨリ
木ハエテ上ニテ枝ト枝ト相連リ鴛
鴦來テ其木ニスム朝暮カナシミテ
嘴コレヲ連リ理ノ枝ト云搜神記ニ出

(鴛鴦の衾)夫婦ナラビ居ル所の衾
をいへり麻ふとんハ又をとり
又をとり鳥の水ゐなしび居をとり。又
をとり鳥の雌雄翅を交へ眠るを
もいふとぞ鳥の相ゐなれるを
めでゝ鴛鴦帳鴛鴦幌などいへり

(哥)ふるゝ〳〵ぬるとの衾のおもいかも
ふ代をこめるもとのゆめ　家隆

(鴛鴦の沓)堂上方又ハ僧家ニ用ル
鼻高くして反くるる沓なり

其形鶩の翅に似たる故名づく
○又反ぬ沓を鴨沓といふ

鳧 鴨の字ハ俗字へ種類△真がも
△小鳧△ちゞ鴨△黒鴨△翡翠
△あきはぐさきつも△沉鳧 異名 青羽
鳥 古今集あり。沖津鳥 万葉集に出す

(哥) 拾遺 ふるおかの神のこゝろを
よふかものうかぶ毛をかりいこうちき 公任
千載 親房さ入江のあしのうらの野の
ゐ草の庵ようきれたりしも 顕輔
夫木 ゆきされをまもれ池のこゝろをし
ようれこちるあちのゆ〜を

(詞) ちかも。たかも。うきも。けかも。
うものくれ舟かものうきるあしうもの
ちちくつぎさつえのまおかもめ。かもの
らハげ。かつくうもるの△わちゆ〜△わち
の村ち 小鳥の名 花ちる見ハ
ゆ〜ハあちゆ〜ちゆ〜 美吉がも
右の外みるの縁に見るべし

(能) 鉾野もおもろわるる風きし 嵐雪
ちるくと塩江の野の深草なな 支考

(狂) ちんとてもめくりてもちくゆの中
見川ちりてみゆくかも 貞木

王喬舄 鳧 故事 王喬葉縣ノ令ト云ヒ神
術アリ毎月朔且縣ヨリ
朝ニ至ル其来ルコトノシバくナレドモ騎
ル所ノ車ヲ見サレバ密ニ人ニコレヲ窺
ヒケレバ王喬至ルゴトニ二ツノ鳧東南
ヨリ来ル時其鳧ノ至ヲウカヾフテ網
ヲハリケレバ一隻ノ舄ヲ得タリ則
王喬ニ賜フ所ノ舄ナリ

脛短 鳧の脛短シトイヘドモコレヲ
續ガハ則悲 荘子ニ出タリ

水鳥 水鳥甚多し。天鵞。
鶩。鶏。かハせみ。鷗 等く
事哥ふまむハ。かも。ちどり。ふ
は鳥ちどり。秋ふかの前條に出ル
(哥) あるれなとされのゆのこほまろや
うきうけうつくしかるん 人丸
詞 結入江のまちもまろけくえ
みしに踏るの寄もそけし 忠良

㊂詞 水あそび。うきくり。氷のひま。氷の
うへ。こやの池。さむけき朝。さゆる波
うきね。むれゐる。羽がひの霜。
つらゝの枕。羽風よ成る。みぎハ近く。
よをうきさる。浪に揺ぐ。すだく。ねむる
の下やどうらぬ
ふるひ。ゐの村なる。ふなせまろく。よろくの色
○右の外なゝかもの類ハ入合べし

連 旅や寺ぬるを着せぬ衣（かも）」　宗碩

俳 うねまれ旅ぞゐやう沖のかも　嵐雪

△浮寝鳥 水鳥のうれみがら寐るを いへるうき鳥を雑なり

奇 岸ちらくうつゐのあすうれ旅して まうひみかるゝをーのもゐる　隆房

連 風ふけハ精もうーのうねのうね　宗養
変るやる風よる旅のうき寐なる　立英

狂 きのまてふと金もきれにふきまるや うれ鴛の袖乃ひきうえてて　舊四

△内 鷦鷯 此鳥巣を作る事巧みなるゆへ 巧婦と名付く東雅に出り

木兎 △内 ○鵂鶹。木兎ともに八月の季と もちる委しく八月の條に見べし

鱈 △十月 △塩鱈。俗に大口魚ともいふ肉白し 故に文字雪にしたがふ和字なり 味ハ生よりも塩よし北海多くこれ をとられ若狭の口塩などいへるハ至 て絶品なり細鱗大魚頤の下に 鬚あり見べし頭中に白石二ツ あり性寒をよろこぶ夏月ハ絶て なし南部松前辺冬至の日より 景物初るといふ

俳 かけ笠を絵かきする山路かな　和重

狂 きぬの一種一品よも絵く しかも鱈の水の春　羅人

△雲腸 鱈のわたなり 俳 雲やゝるや たはこも味のうれ山　秀川

△蠣 名 石花。石に生じてつきたる が花のおとし。○一説此貝雌雄 なし汐のさしよる時を待て口を ひらき小虫などの入るを喰ふとぞいへり

汐の泡化して竹の藝州廣嶋
うう出れハ海中に竹垣を立て自
う取付くぐおろくるとうて又
いけおく場所に養ひく諸州おなじ
くも味も中和を得くよし
自然生のれハ大くても味不佳

(俳)蓬てもうかふかきえの坂石籟
蛎むきや我おハ人へぬれうそ　其角

濁舟　浪花川岸所々の舟を出め
てかきの殼高く皆廣嶋うう

△**鯨**　△鯨突　△鯨舟　△鉾突　(和名)勇魚
万葉に出　(名)海鯨。雌を鯨といい雄を鯨らふ鯨いと多くの事なるも
ものくらの形と大なるとの事ハ見立るこ

来て他国の者白し冬月来るに
同日に来て越年して又同日かゝる　利全

(俳)蛎舟の風うこそ
蛎ふるあうふちもしんの丁　支岳

(狂)蛎殼と浜へのの横乃ゆきおう
ちちくくへのおうふとうう　道足

(俳)逐るもけ〳〵やつる鯨ハ多鳳
鯨ハいかつる夫ふのうくらふ　金波

(狂)ものもうこうら逆のまてゆふくお
ふ紙おりくやくふ　喜木

氷魚　△氷魚使　昔八宇治川田上川
等より此魚を貢物に奉り
とそれを氷魚の使くいく季くハ
九ノ四十二丁網代打の条に見るべし
按ふ氷魚和名こほり魚とい

(俳)ないるあふ魚の使やおるる　東向

鯨ひのふくきやおりきておるハ野坡
氷魚よるやはふてはふさけさ月の屑　温古

鮠　(名)サホリ。形ちそせふ似てハさ
し大和本艸も形ちそせふ似さり
△と出さり○白魚に似さるといふハ非
いさるの歌　白魚よあくばとくて

(俳)彩嫁ク原ハ古ケ冥ハいさ氷　瓢水
ハ冥ハ冥る乳の下の碧ハさ亀　北溟

網代　△網代木　△網代守　△網代人
○川岸ようう木ハうちて網

の廣がりたる形あり　て氷魚のたく
よひくいれを再び出る支を得ざる
やうにとる網のかうにとるもの
ろといふ意なるべし　ろといふ是なり
くひ取るためを網代人も網代守とも
いふ季しく八九月生類四十二丁小出

(哥) 拾遺集　元輔

月影の白上の川なさよけきハ
あしろのひとのよるもうんへ名れ

新古今　慈田

網代木のいさよふなみのまふけくも
ひとりやねぬるやうなの檜ひ矢

金葉　皇后宮肥後

網代のよる川せよんゆる網代木ハ
川もそこなみのうけまゆるうん

夫木　[illegible]

網のなみはうれちつりうる　貫之

(能) 恵なるにはなかせいて網代をる支考
あ〜れせよ網代の岩茶てきん　芭蕉

(狂) 呂うくん図果志〜ゆ小車ハ
あしろの桑のひとハふるく　貞徳

夜與引

冬の夜中の獣を狩時犬を引くれをよこひくとふ

柴漬

柴をふしとふ古言生柴を枝葉とも三四尺ふ切
く川水の浅きところふ積事水の面
より少高し左とれ雑小魚ハ柴の下
ふ集るとふおく網を四方ふ張て
柴をとれハ魚とくくゆくふ入これ
寒気の時れとざ立春後川水ゆる
なるのふりうてハ魚柴の下ふ集らず
○淀伏見其外所々ふ切れども
て水の浅き所ふくみれ事なり

(哥) 夫木　[illegible]

のムおさえ紀多とうちとうれ　俊頼

竹筌

△筌　魚梁の末ふうけ置ろ
ごのごとくのもの魚梁に
のぶうけうけ入る器く竹ふく作る

(能) [illegible]

(哥) 万葉　[illegible]

潤眼（十）　鰯の種類四く長く眼大きなるをいふ

（能）　丞相祠堂前の池の中に十間四方の宅あり　乙州

（狂）　なまぐさい物くらへば目がうるむ　真柳

河豚　乳。河豚は家の味ひに似たり　道乎

（名）　鱧鰊（異名）西施乳。物ふれふいう腹ふくるゝ西施乳といふ　古名ふぐなり

（名）　ふぐと汁

（能）　昔西施乳といふ美人の乳にたとへたるなり

（狂）　名こそ立てふぐとうるはなれば　道乎

ふくれいのちこそおけに多くん

妙　○ふぐの毒よりうるとれば

茶　つはの葉のふぐ汁を用ひし

生海鼠　海鼠を虎鯨に似る故名く　止水

（能）　海鼠を尾にハ胴あるゆへ

海鼠　彦火々瓊々杵尊ノ時諸魚故事皆仕ヘ奉ルヲ申ス海鼠獨リモノイハズコレニヨツテ天ノ鉏責命細キ小刀ヲ以テ其口ヲサク故ニ今ニオイテ海鼠ノ口拆ク是ナリ云云日本紀ニ出

海鼠腸（能）　されこれるや尾花のちるれさられいあを　完中

鮪　○はつのこ。大なる王鮪中なるを叔鮪小なるを鉛子東国

みゝはぐろといふ西国にて細こと大魚なるを他国にて切て賣を大魚の切身と

いふ初細のはつこを昔賞したるを今ハ賤物と成て上に用ひ

こんの子ハ上ハ出ちんを秋下おりんを

（哥）　万葉　鮪つくるあはれもせるいさり火の多く出ちんを秋下おりんを

必用　此部の事ハ三冬の丑の日に用ひ出るとかやこれを起るをよしとい

養生　冬ハ夜早くいねて朝ハ日の出るを待て起るをよしとい

冬占候 ふゆのうらない

の日雨ふれば来春五穀
のよくしい高〳〵又かのとの巳の日雨
の〳〵巳の日雨ふれば同あくひしたう〳〵
きの〳〵子の雨ふるべバ牛羊おほく死
す。つちの〳〵卯の日風あれば人民大ホ
煩ふ九風ふき〳〵土烟をまして雲
のでく空よりまじりて黄ばみる色有
ハ吉慶やう黒色赤色なるハ火
災あり紅紫なる吉なり

冬天氣 ふゆのてんき

忽ちあさうなる〳〵雨〳〵巳午
の日晴れば其月雨多し未
戌の日曇るべ其月雪多し申酉の日晴ハ
其月霜多し子亥の日雨ハ其月甚寒〳〵

飲食

此部ハ冬分人力あ〳〵
製〳〵する食物を集む

切干 きりぼし

冬大根又ハ蕪を薄くきり
て干〳〵貯へ常ふ煮て喰ふ

△十

菹漬 くきつけ

△菹菜。大根の葉ともに
塩ゑ漬るゝと菹漬〳〵ふ

△十

生薑酒 なましやうがさけ

酒ハ生姜を和ふる 俳 生姜
ハ医者の用ゆる所ハ可風

狂 身をまもりかせけとかくとも美ハ
かゝるも砕る世ゆえとあるれ 徳四

雑卵酒 たまござけ

酒ハ玉子ハ和〳〵たるゝ妙
ゆるゆるハ料理重宝記ゆくべし

△日

鍋焼 なべやき

俳 汁やきやあひ〳〵
焼くもよろし

杉焼 すぎやき

杉の香を魚肉ゑ移ス
杉板の〳〵ゆくゆく

狂 ゆ〳〵煮るもよろし

俳 杉やきやいれて出ぬ底の焼一九

風呂吹 ふろふき

△大根ゑ蕪ゑ
吹。ふ〳〵大根ゑ湯煮ス

いも〳〵みそとうみく食ん

俳 ふろふきや宮ゆ汗のえ〳〵ゆくり杜橋

狂 むかしゆくるむかしれあこきハ
人くよろこんけゝ玄吹 占安

納豆汁 なまめとじる

大豆を煮て土窪ゑ入
待〳〵ら包

納め貯ふ用意板上にそなへ
たくき味噌つゆの汁のごとしと
煮るかう或ハ塩酒魚鳥みどり
ハへくも煮かうりと僧家にて初む

俳　ほうろうとさとられぬ納豆汁　許六
此句禅僧の意をちくめり

狂　納豆のけハ汁ハ豆腐の好ぶぬ分
をあくまるかハとられども　百松

柚味噌

柚

俳　碓陣につくらん尾の　北涙
柚味噌

蕎麦湯

△そむぎ也。そばゆ。そばゆ。そばゆ。
○そばの粉を湯に和し
て喰ふ。をそば湯とも云。そばゆ。
ハ蕎麦の粉を文火にて焼る時ハ
ゆのおくとなるをだし汁にかけ
て食用こゝ。そばがゆともいふ

俳　蕎麦粥やおるなのやうなるを天我
○右飲食のるい温熱を賞して喰ふが
由へ冬の季こゝ。製法委しく日
本歳時記に出ル見るべし

文化戊辰末秋発行　京字屋市左衛門